

D・H・ローレンスにおける時間性-『恋する女』一面-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 入江, 隆則 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8945

D・H・ローレンスにおける時間性

—『恋する女』一面

入 江 隆 則

1

D・H・ローレンスの小説の世界を十分に味わい、これをよく理解するためには、何よりもまず、その文章の独特の象徴性に注目しなければならない。

ローレンスの代表的な小説作品といえば、周知のように『白孔雀』や『息子と恋人』にはじまり、『虹』『恋する女』『迷える少女』『アーロンの杖』『カンガルー』『翼ある蛇』などをへて『チャタレイ夫人の恋人』『死んだ男』にいたる長編小説群があるわけだが、これらの作品は一見象徴性とは縁のない、いかにも十九世紀的なリアリズムの精神によって書かれているようにもみえる。この作家がきわめて自伝的色彩の強い作品、つまり作者自身と思われる人物を中心にした作品を多く書いたというせいもあって、リアリスト・ローレンスという虚像は今だに消えていないばかりでなく、大きな魔力をふるっている。この種の虚像をつくり上げた罪は、ローレンス自身のある意味でのそれを別とすれば、初期の批評家たち、とりわ

けこの作家と生前に直接面識のあったミドルトン・マリーやリチャード・オールディントンに帰されるべきであろう。日本におけるローレンスの受けとり方についていえば、この種の伝記的評価が作家の私生活のゴシップを珍重するという抜きがたい私小説的偏見と結びついて、場合によってはきわめて醜悪なローレンス像が流布しているようにみえる。

しかしこういう有害な先入観念をすてて、心を空しくして彼の小説の言語の世界に身をひたしてみると、まず感じないわけにはゆかないのは、一つ一つの言語、あるいはそれが集積されたパラグラフの中に、詩の領域に本来属すると思われるたぐいまれな喚起力、古代的言語の復活とも呼びたいほどの、新鮮で強靱な詩性がみちあふれているということである。

このローレンス独特の象徴性は、彼がまだ二十一才の時に書いた最初の作品『白孔雀』のややたどとどしい文章の中にも明確にその姿を現わして、『虹』や『恋する女』において豊潤な結実をもたらし、晩年の作品ではいくらかおとろえたようにもみえるが、やはり確実にその存在が感じられる。例えば『虹』の発表以来悪名の高いものとなったローレンスの性描写とかいいうものも、彼の駆使する言語の豊潤な文脈の中に正しくおいてみれば、現代文学のあらゆる領域に巢食っている卑俗なポーノグラフィとは全く異質で、猥褻性を完全にまぬがれたある不思議な宗教的活力にみちた象徴性をもって迫ってくるといわざるを得ないのである。

ところで、この象徴性なるものの意味を十分に論ずるためには、それが人間存在における時間のある種のあり方であることに最初に注目しておく必要がある。象徴作用を一般的に定義しようとすると、質的に異った二つのものがなんらかの類似によってかかわりあい、一方が他方を表現する関係をもつということになるが、この関係が時代精神の中に根を下ろしたもとなるためには、時間とはまず持続であって、持続の微分的要素としての瞬間が持続に先立つことはないという時間意識が定着している必要があるという点に注目しておかなければならない。

一つの時代の基本的な精神的風土が、象徴主義そのものだった時代といえは、まずあげなければならないのはヨーロッパ

の中世の場合であるが、この時代の特質は、創造主である神を中心として、人間精神のあらゆる領域にうちたてられていた整然たるシンボルの配列にあったことは周知のところである。ジョルジュ・プーレが著書『人間の時間の研究』で述べているところによれば、この中世的象徴主義の世界を支えていたものは、中世人の意識の中に確固とした根を下していた「瞬間」に対する「持続」の優位の確信であったという。つまりプーレによれば、中世的人間というのは、自分が実在するのを感じずることは、自分が変化し、生成し、継続するというような、なんらかの意味で「瞬間」の概念をふくむ感情を体験することではなくて、自分がそういう「瞬間」の存在に先立って存続するのを感じるような人間であったというのである。そして「瞬間」に対する「持続」のこの優位が崩壊して、個々の「瞬間」がその個性を主張しはじめるにつれて、あの絢爛たる中世的象徴主義の世界もまた崩壊せざるを得なかったのである。

私がここで、D・H・ローレンスの小説の象徴性を論ずるにあたってプーレを引き合いに出したと思ったのは、中世的象徴主義の時間的構造をとらえるプーレの見解が魅力的だと考えたからではない。象徴主義を支えるものとしての、「瞬間」に対する「持続」の優位という考え方は、決して中世的世界にだけ適合するものではなくて、ローレンスが生涯にわたって自らの存在の故郷であると感じていた異教的古代の世界にもまた十分に適合すると思われたからである。いや、キリスト教の侵入によって「直線的時間」の意識が生じる以前の汎神論的古代の方が、「持続」の優位という点でははるかに強力なものであり、ゆたかな広がりを持たせていたようにさえ思われるからである。

例えば、エーリッヒ・アウエルバッハは古代の歴史記述の方法を後世の方法と比較したある文章の中で、タキトウスをはじめとする古代の歴史家たちは「生成」や「変化」や「因果関係」といった、歴史の△内部▽にあつて歴史を動かす要素という何らかの意味で直線的な時間を示唆する概念を全く考慮していないことを指摘している。アウエルバッハによると、直線的な方向性をもったこの種の概念がヨーロッパの世界にはじめて現われるのは『聖書』をもって嚆矢とするという。この

観点から見れば、宗教的な中心がローマン・カトリックであったような中世的「持統」の中には、すでに古代の知らなかった「変化」の概念が滑り込んでいたと云わざるを得ない。してみれば、古代的な「持統」の意識は近代における「瞬間」の優位からは、中世をへだてて二重に遠い彼方であったわけで、この汎神論的な「持統」の世界が近代文学の中にきわめて稀にしか定着されていないのは、ごく当然のことだといえるのである。

D・H・ローレンスが、生涯にわたって異教的古代の世界に対して、強い親近性を感じていたことはよく知られている。ケルト、エトルリア、古代メキシコをはじめとして、ある時には心から賛嘆し、またある時には激しい拒絶を示したギリシヤ・ローマの世界。あるいはまた『アポカリプス論』の中で古代ユダヤに対して示した強い嫌悪感の中にさえ、アンビヴァレントな親近性がこめられていたといえるかもしれない。いずれにせよ、小説の中にもエッセイや紀行文の中にも、汎神論的「古代」が大きな影を落していることは疑いをいれないのである。D・H・ローレンスの世界があれほど強力な象徴性に満ちあふれ、ダイナミックな生命感にあふれているのは、正にこの古代的「持統」の世界が、ローレンスの肉体の中に復活し、その「持統」と「瞬間」との激しい相克が、ほとんど総ての頁にわたって躍動しているからだと思われる。

だが私は、ローレンスにおける「古代」を論ずる前に、まず「近代」を見るローレンスの視点に注目したいと思う。というのは彼の見る「近代」そのものの中から逆に、ローレンスの「古代」の性格が浮かび上ってくるように思われるからである。

2

ローレンスの中期の傑作『恋する女』の終り近くに、第三十章「雪に閉じこめられて」という章がある。わずか四十頁に満たない短かい部分であるが、この後に続くのはさらに短かい付け足しのような最終章であるから、この章はいわばこの小

説全体の決着であり、クライマックスだといつていい。

私は長い間この部分の、実に薄気味悪い、雪の中で白骨となった魂が「死の舞踏」をおどっているような異様な雰囲気はひきつけられてきた。それというのも、ローレンスの眼から見た「近代」の墮落と狂気と、さらにまた「瞬間」の反逆という近代的な時間意識が、この章ほど見事に定着されている部分は、数多いローレンスの小説の中にもまたと見出しがたいと思われたからである。

この章には三人の主要人物が登場する。まず第一に、「薄気味の悪い孤独」の中で誰とも接触せずに、「腐敗の河にすむ鼠のような生活」をしているオーストリア人の彫刻家ローエケ、次に、このローエケの不思議な魅力のとりこになるブラングウェン家の妹娘グドルン。第三は、彼女の恋人で近代産業の中に自分の全存在をかけていて、いわば近代技術世界の化身のようなジェラルド。

この章に終始一貫して流れているモチーフはグドルンとジェラルドという二人の恋人が、愛の不毛あるいは不能の状態におちこんでいて、彼等の間にあるのはサルトル的な相克 (conflict) 以外の何ものでもなくなっているということにはかならない。つまりこの章の内容は、グドルン、ジェラルドという不仲の恋人に加えてローエケという男を配した三角関係であつて、彼等は、三人三様の形で、ヨーロッパの近代を支配しているぎわめて不健全かつ非本来的な狂気の諸相を代表していて、いわばファウスト的近代という「死の舞踏」を演ずるトリオを構成していると云つていい。

彼等の中で、最も進んだ狂気の段階を代表しているのは、いうまでもなくローエケである。この男は「自分自身の完全な外被に包まれた芸術家」であつて、「魂の一番深いところで、あらゆるものから孤立して、天も地も地獄もない」人間だとされる。そして彼の最大の武器は「理解力」であり、これによってローエケは「嘲笑的な破壊の想像」という知的遊戯や「生命を分解させる悪魔的な活動」にふけることができるというのである。

そしてこの悪魔によって魂の内部が侵蝕されているのが、グドルンとジェラルドという二人の恋人である。この文章を最初から虚心に読みすすんでゆくと、ロエーケという男はグドルンとジェラルドという恋人の外部に在るというよりは、今いったように、彼等の存在の内部に巢食していると見た方がこの雰囲気をよく表わしていると考えずにはいけない。したがって彼等の三角関係は、実に奇妙な三角関係だというほかはなく、グドルン、ジェラルドという二人の恋人の存在の内部をペスト菌のように侵蝕して愛の能力をうばい、つねに相克を繰り返すように仕向けているのがロエーケという悪魔のしわざであるように見えるのである。

実はこの点は私の勝手な想像ではなくて、ローレンスがロエーケという人物を創造するにあたって、北欧ゲルマン神話の悪神ロキを念頭において、Loki からのアナロジーによって Loerke という名前をつけていることが H・T・ムーアによって指摘されている。⁽²⁾なるほどそういわれてみれば、この小説の最初の方にはニーベルンゲン族のことなども述べられていて、北欧神話との対比は十分成立するといえそうである。その最も有力な要因は、何といても、女主人公のグドルン (Gudrun) という名前が北欧神話『エツダ』に出てくる姫の名前と同じだということである。またジェラルド (Gerald) というのは古代チュートン語で戦士を意味する単語だということだから、これまた『エツダ』の中でグドルン姫の夫となる勇士シグルド (ジークフリード) に対応しているといえる。

実際私はここでロエーケという奇妙な男を描写するローレンスの文章を読みすすみながら、ヴァレリーの『わがファウスト』に出てくる悪魔メフィストフェレスを連想せずにはいられなかった。もつともヴァレリーのメフィストフェレスは威勢がわるく、悪のお株をファウストにうばわれているようなところがあるから、ローレンスのロエーケはむしろヴァレリーのファウストその人に対比すべきであるのかもしれない。

R・M・グラントはヨーロッパ二十世紀の精神的状況をグノーシス派の異端と比較したある文章の中で、さまざまな宗教⁽³⁾

がそれぞれ異つた度合に「神中心」であるのに反してグノース派のみは「人間中心」であることを強調している。この観点から見れば、ヨーロッパの近代はきわめてグノースティックな時代だといふべきであつて、ローレンスのロエーケやヴァレリーのファウストは、この時代を代表する典型的な人物だといえるのかもしれない。

そしてグドルンとジュラルドという二人の恋人の愛の姿も、以上のようなグノースティックな現代の精神を十分に反映していると言わなければならぬのである。即ち、ジュラルドにとつてグドルンという女は「固い外被にかこまれて、破壊的な意志をもっている悪魔のように冷たい自己完結的な存在」としてうつる。逆にグドルンにとつてジュラルドが十分に魅力的でないのはジュラルドの「理解力」がロエーケのそれに遠く及ばないという理由からである。またジュラルドはジュラルドで、ロエーケに対して「昆虫のようないやらしさ」を感じるのだが、ロエーケに対抗できる別の精神的原理を所有しているわけではない。つまりこの三人がお互いに相手に対して投げつけ合っているのは、嫌悪と軽蔑と不信の眼差し以外の何ものでもないのであつて、ここに現われるのは正にサルトルの戯曲『出口なし』(Huis-clos)を想わせるような現代における地獄の真相に外ならない。そしてこういうグノースティックな近代の奈落の只中に現われてくるのがグドルンの狂気じみた時間意識なのである。

一日一日が機械的に続くという考え、一日一日が無限に続くという考えが、彼女の心をふるえさせ、狂気が本当に迫ってきたような気持にさせた。チクタクと打つ時のおそろしい拘束、時計の針の動き、時間と日の無限のくり返し、それは考えるだにおそろしいことだった。しかもそこからはどんな脱出口もないのだった。

彼女はジュラルドがそばにいてくれて、このおそろしい想念から救ってくれないものかと考えた。ああ、そこにひとり横たわつて時計の恐怖と、その永遠のチクタクという音にとりかこまれて、彼女はどれほどの苦しみを味わつたことか。

彼女の生命のすべてが崩壊してしまつたかのようにだつた。チクタク、チクタク、チクタク、時を告げる音、再びチクタクチクタク、チクタク、秒針の絶え間のない動き。

ジュラルドには彼女を救う力はなかつた。彼の肉体、彼の動作、彼の生活——それは同じようなチクタクという動き以外の何ものでもなかつた。彼の存在そのものが文字盤を横切つて動く、同じような針の動きであり、時計の表面を横切るおそろしい機械的な運動にすぎなかつた。彼の接吻や抱擁は何の役にもたたなかつた。彼女にはチクタク、チクタクという音が聞えるだけだつた。

はあ、はあと彼女は笑つた。あまりのおそろしさのために、笑いとばそうとした。何とそれは狂気じみたことだらうか。彼女はある朝起きてみたら髪の毛が真白に變つていて、ひどく驚くようなことになるのではないかと、自意識にみちた身振りのなかで考へるのだつた。この想念は、重荷のようにたえがたくのしかかつてきたので、髪が本当に白く變つてしまつたような気がしたほどだつた。だが、髪はいつでも茶色のままだつた。

(中略)

彼女の人生とは、時計の文字盤の前に立たされた人生だつた。彼女が駅で本を見ようとして売店の方を振り返つてみる時にはいつも彼女には時計が見えるのだつた。それはいつでも大きな白い時計の針だつた。本の頁をめくつても、土で彫像をつくろうとしても無駄だつた。彼女は、自分が本当に本を読んでもいなければ、彫像をつくつてもいけないことを知つていた。彼女はただ、永遠に動きつづける機械的な単調な時の文字盤を横切る針を眺めているだけだつた。彼女は一度も本当に生きたことがなかつた。ただ生活を眺めているにすぎなかつた。実際、彼女は永遠という巨大な時計に向き合つた小さな十二時間時計のようなものだつた。

ジョルジュ・ブーレが中世的な「持続」に対する「瞬間」の反逆としてとらえたような近代的意識の極限をこれほど適確に描いた文章はまたとないと私は思う。それは正に狂気に到るまでの「瞬間」の反逆であり、「一瞬ごと⁽⁴⁾にわれわれの中から一人の異邦人をつくる」ような瞬間の中に生きる人間の恐怖に外ならない。このグドロン⁽⁵⁾の独白の中に見られる不安はブーレのいわゆる、「どんな存在理由も自分に発見できず、同時にまた自己の存在の連続性を保証するどんなものも見出すことができないような実在のなかに生きる人間の不安」⁽⁶⁾であって、それはまた「何ものにも似ていないし、何ものの上にも休むことをしないある瞬間のなかに投げ出された不安」⁽⁶⁾だというほかはないのである。

ところでわれわれがここで留意しなければならないことは、時間意識に対するこの種の鋭い問題意識はD・H・ローレンスに限らず、現代文学の広範な領域の中に見られるきわめて普遍的な現象だということである。現代思想の動向のいくつかを思い浮べてみてもフッサールの『内的時間意識の現象学』やハイデッガーの『存在の時間』以来、メルロ・ポンティ、L・ビンスワンガー、メダルド・ボスあるいはジェイムズ・ベンジガーなどにいたるまで、時間についての同じような危機意識がいたるところに発見できるのである。多分これらの現象はすべて、近代的な「瞬間」の優位に疲れて、これに飽きた現代人が、新たな「持続」を発見しよう⁽⁷⁾とあがいていることの現われであるのにちがいない。だが新たな「持続」を実現することはどういう方法によって可能なのだろうか。それはおそらく「瞬間」の側から「持続」に近附こうとする努力によってはいつまでたつても達成されないのではないだろうか。私がD・H・ローレンスの文学に尽きることのない興味を抱くのは、今まで述べてきたような近代的な瞬間の優位をとらえる秀れた感受性に加えて、その「瞬間」の優位を超える「持続」を、彼の駆使する言葉の、みずみずしい生命感にあふれた象徴性の中に発見するからにはかならないのである。

小説『恋する女』の中で、ローレンス独特の「持続」と呼ぶべきものが最初にその完全な姿を見せるところといえば、まず何をおいても第十四章の「ウォーター・パーティー」をあげなければならない。

この章の冒頭は、園遊会に集った人々が、湖のそばの胡桃の木の下でお茶を飲んだり、水上にボートを浮かべて遊んだりという、ごくありふれたリアリティックな描写によってはじめられる。ところが数頁がすぎて、グドルンの姉のアーシュラーが着ているものを脱ぎすてて、裸になって湖水の中にとびこむあたりまでくると、次第に文章全体の調子が奇妙な象徴的な雰囲気を持ただよわせはじめ。

実は、こういうところがD・H・ローレンスの小説の面白いところであって、アーシュラーだとか、グドルンだとかの名前をもった二十世紀のイギリス近代女性の姿はここで突然消えうせてしまう。そしてそれと同時に彼女たちの時間を特徴づけていた「瞬間」の優位もまた消滅してしまい、二千年の歴史の流れが急に凝縮して、あたかも古代ゲルマンの亡霊が彼女等の中に生き返ったような具合になるのである。こういう比類のない転調の見事さは、ローレンスの生得の能力によるという外はなく、この点を味わうことがローレンスの作品を読む面白さの主要な要素だといわねばならないのである。

ここでグドルンはアーシュラーの歌う歌にあわせて、かつてアシュタルテの女神とともに古代人が踊ったようなダンスを踊りはじめめるのだが、そのあたりを読んでいるとあたかも近代という直接的な時間の中に、忽然として豊かな古代的時間が流れこみ、強烈な生命の氾濫がはじまったような印象をうける。もはやわれわれの周囲には自然とのゆたかな交感にあふれたアニミズムの世界以外の何ものも存在しなくなってしまう。そしてそういう古代的「持続」のただ中で、グドルンと牛の群との正に異様であるとしかしいような驚くべきコミュニケーションの場面が展開されるのである。

グドルンは両手をのばし、顔を上に向けて、不思議な動悸をおぼえながら、牛の群に向って進んでいった。彼女の肉体

は呪文にかかったように牛に向って浮かび上っていた。足は無意識の感動の中で狂ったようにふるえ、腕と手首とは高くかかげられては振り下された。彼女の胸はふくらみ鼓動しながら進んでゆき、その喉は情欲の恍惚境にあるように露出していた。彼女の神秘的な白い指が、うっとりとして夢うつつのような状態で牛に近附いて行った。牛の群には不思議な波のようなものがあったよっていた。牛は彼女から退いたところで頭を突き出して待機し、その眼は催眠にかかったように開かれていた。くつきりと枝分かれした牛の角がむき出されていた。彼女の白い指も同じ催眠状態にあるようにゆっくりと振動しながら牛の群の上で波打っていた。彼女は自分のすぐ前にその波を感じた。それはあたかも、電気の振動が牛の胸から彼女の手に伝ってくるような感覚だった。彼女はその波にふれることさえできそうだった。恐怖と喜びのおそろしいほどの戦慄が彼女のからだを貫いて走った。そして、アーシュラーは、その間ずっと、呪文にかかったように、細く高い声で歌い続けていて、その魔法のような歌声は、次第に深さを増してゆく夕暮の中を貫いて響いてゆくのだった。

(Penguin Books p. 187)

ローレンスの秀れた伝記を書いたH・T・ムーアによると、ローレンスはこの小説を執筆する頃までに、タイラー、フレイザー、ハリソン、ギルバート・マレイといった人類学者の著作に親しんでいて、未開人の心というものに大きな関心をはらっていたという。⁽⁷⁾もしこのムーアの説を信ずるとすれば、右に引用した部分に見られるようなグドロンと牛の群との異様な交感^{コミュニケーション}の場面には、ジェイン・ハリソンが著書『古代芸術と祭式』の中で詳細に述べたような「牛追いの春歌」の調べが反響しているのかもしれない。

来よ、春に、ディオニューソス

エーリスの宮に淨き宮に
めぐみ姫たちとともに

牛の足にて駆けつつ、

貴^キぎ牡牛よ、貴^キぎ牡牛よ

(J・E・ハリソン・佐々木理訳『古代芸術と祭式』七一頁)

ハリソンの述べるところによれば、この牛追いの春祭りはイギリスをはじめヨーロッパ各地に広まっていた民俗的な行事であるということである。めぐみ姫^{カリテス}というのは「時姫たち」すなわち「季節たち」であり、彼女等はあらゆる物質的かつ精神的な豊作の与え主であつて、このめぐみ姫^{カリテス}たちが、豊饒力そのものとされていた神聖な「貴^キぎ牡牛」とともに来ることは、とりもなおさず春のおとずれを告げるものだという。ハリソンは更にギリシャのアテナイにあつた「牡牛殺し」(Bouphonia)について言及し、古代ギリシャ人たちが神聖な牡牛を莊重な儀式をもつて殺し、参列したすべての人々がその肉を食べる事によつて牡牛の特殊な生命力が人間に乗り移り、季節が復活すると信じていた点を強調している。つまり神聖な牡牛は年ごととふたたび生まれがために死ぬのであり、ここに「死」と「復活」という宗教的觀念の原型があるというのである。

しかしもちろん私は、ローレンスの小説の中に古典学者ハリソンの影響が見られるというようになつたらぬことを云いたいのではない。ハリソンによれば、この牡牛追いの春祭りは、今日でもイングランドの幾つかの地方に残っている風習だといふことだから、ハリソンの著書を読む以前の少年時代のローレンスが、この民俗学的風習を実際に見聞したことは十分に想像できることである。またパトリシア・メリヴァルによれば一九一三年から十四年当時にはイギリスを中心としたヨーロッパ

に、牧羊神パンの神話が不思議な関心を集めていたというし、⁽⁸⁾ドイツの画家キルヒナーがドレスデンの博物館で発見したアフリカやメラネシアの美術がこれまた異常な関心を集めたのも同じ頃だったという。⁽⁹⁾したがってD・H・ローレンスの小説がこういう当時の知的雰囲気を反映していることは十分考えられるところだが、それだけではローレンスの言葉にみながっているあのゆたかな換起力を説明することは到底できないのである。結局われわれはこういうアニミズムの世界を直ちに自家薬籠中のものとしてこれを生かし、現代という歴史的時間のただなかに、古代的時間を導入することのできたローレンス生得の言語的能力に注目せずにはいられないのである。

小説『恋する女』の中で、こういうローレンス的な「持続」がほとんど仏教的な涅槃を思わせるような、あらゆる罪障から解きはなされた、清らかな無時間の世界に到達しているのは、この小説の中のもう一組のカップルであるアーシュラーとバーキンとが「星の均衡」のような愛を完成する第二十三章「流浪」においてである。

この章は、バーキンとアーシュラーが、バーキンのかつての恋人ハーミオニのことで争うところからはじまる。しかしやがてバーキンが、彼の精神性とは「墮落の過程」でおこるものであり、ある種の「自己破壊の喜びに付随している」ものであることを自覚した時に、彼とアーシュラーとの間には、この上なく深いほとんど宗教的なまでに崇高な関係が出現するのである。

この時、アーシュラーにとってのバーキンは、「世界がはじまった時にいた、人間をこえてはるかに偉大な神の息子」であるように感じられる。そしてアーシュラーもまた自分自身を「この世の始めに、不思議な非人間的な神の息子たちとこゝろに帰ってきた人間の娘」であるように感じ、バーキンとの「星の均衡」の成就によって、はじめて真の自由を獲得して解放されたことを実感するのである。

私はここで二つの点に注目したいと思う。第一には彼等の得たものが「断じて心的なものに変形されることのない生き生

きとした官能的な実在」(Vital, sensual reality that can never be transmuted into mind content) だと書かれてゐる点であり、第二には彼等の関係は「愛でもなければパッションでもなく」(this was neither love nor passion) と述べられてゐる点である。私はすでにロエーケという悪魔のような男をヴァレリーのファウストに比較した際に、ロエーケとファウストに共通している特徴は彼等の「理解力」であり、彼等があらゆる対象を「見」てこれを主観の対象として把握しなければすまないことを指摘しておいた。つまりロエーケにしてもファウストにしても彼等の存在の意味はあらゆるものを「心的なものに変形」することにあるわけで、この点こそ、グノーシス的、あるいはファウスト的近代の精神的特質だったのである。「世界」が「世界そのもの」としては失われてしまい、それがすべて「世界像」にすりかえられてしまふという点に近代世界の特質を見たのは、ハイデッガー⁽¹⁰⁾だったが、これを別の言葉でいえば、ローレンスがここで書いているように、ものが「心的なもの」に「変形」されること以外の何事でもないはずである。そしてアーシュラーとパーキンの体験としてここで述べられていることはまさにその正反対であつて、アーシュラーの到達する「太古からの微妙な静寂のなかで、永遠の生命にあふれた超時間的世界」というのは、生れてきたばかりの赤子の眼か、動物の眼にうつるような世界、そのものとだと云わねばならないのである。

この点はまた彼等の体験が「愛でもパッションでもない」と書かれてゐるところから、別の点で意味を補足することができる。「愛」という言葉から直ちに連想されるのはキリスト教的な「アガペー」であり、「パッション」という言葉が示唆しているのは、ニーチェが称賛してやまなかつたようなデュオニソス的な「エロース」であろう。ローレンスが古代的異教の世界をその存在の故郷としていたことから考えると、ローレンスの望んでいたものは、外見的にはニーチェの所謂デュオニソス的なものの復活のようなものだったと思われられるかもしれない。しかしローレンスはこの小説の別のところでも述べているようにデュオニソス的なものの中にすでに根源的生命に対する反逆と墮落の萌芽を発見してこれを避けようとしてゐると

というのが真実なのである。「パッシオン」という語の古義の一つに「病氣」という意味があることは周知のところだが、ローレンスの立場は「愛」と「パッシオン」とをともに「病氣」としてとらえるきわめてユニークな立場だといわなければならぬ。したがってここでアーシュラーとバーキンの関係を描くに当って「愛でもパッシオンでもない」と断っていることは「星の均衡」という言葉で示されるローレンスの愛がアガペーでもなければエロースでもない更に一層原初的な、いわば仏教的な涅槃のごときものを現わしていると考えざるを得ないのである。

しかし、「涅槃」という言葉がローレンスの世界を表現するのに必ずしも適切な言葉ではないとすれば、「知識の死である知識」(the knowledge which is death of knowledge)という言葉で現わされるようなローレンスのニルヴァーナを示すためには、タキトウスが名著『ゲルマニア』で描いたような、古代ゲルマンの神々しいまでに清純な世界を思い浮かべるべきかもしれない。なぜなら、ローレンスの本質は、この小説が北歐神話『エッダ』を下敷きに行っていることからわかるように、秀れてゲルマン的なものであり、妙な云い方になるが、ローレンスの涅槃は、もしこういう言い方が許されるとすれば古代ゲルマン的な涅槃だといふべきだからである。

4

ここで私は、以上のように近代的时间と古代的时间との交錯の中で展開されるD・H・ローレンスの小説の世界を、われわれはどういうかたちで受取るべきなのかという問題を提起したいと思う。つまり、ローレンスの文学を支えている根底的な衝動が、彼がそこで生まれてそこで死んだヨーロッパの近代世界に対する激しい嫌悪感であったことは確かであるとしても、その徹底的なヨーロッパ的近代への拒絶を、非ヨーロッパ人であるわれわれは、どういうかたちで受けとめるべきなのかという問題を考えてみたいのである。

ローレンスのほとんど生理的なまでの嫌悪感が最も図式的なかたちで現われているのは、第十四章「ウォーター・パーテイ」の後半であろう。ここでパーキンとアーシュラーがボートの上から暗い沼地の中をのぞきこみながら象徴的な会話を交すところがある。

パーキンの語るところによれば、この沼地の中には「結合による創造の河」と「分裂と崩壊の河」という二つの相反する流れがあるという。いうまでもなく、彼等の見つめている沼地は、一方では彼等のボートが浮んでいる現実の沼であると同時に、他方では生命史の過去から未来にわたって生命を生み続け、またそれを吸収してゆく、象徴的な時間の沼でもあるのである。

パーキンは現在の人間はすべて「崩壊の河」に所属していて、腐敗と墮落を続けているという。そして「崩壊の河」がはじまる以前に滔々として流れていた「結合による創造の河」は今は勢力がおとろえているが、いつかは必ず再び地上を覆って流れるようになるはずだという。ここでパーキンのいう「分裂と崩壊の河」が「近代」に対応するものであり、「結合による創造の河」は「古代」に対応するものであることはいうまでもない。もう少し正確に言えば、パーキンはここで「分裂と崩壊」の発生は美の女神アフロディーテの誕生にまで遡ることができると云っているのであるから、「崩壊の河」は「近代」というよりもっと広大なものであり、ソクラテス以前の時代を除くすべてのヨーロッパの歴史を意味するというような大きな話になるのかもしれない。だがいずれにせよ、ローレンスがヨーロッパの近代という時代を、崩壊と分裂と墮落とが極限に達した狂気じみた時代だと考えていることは確実であって、そのグノーシスの狂気を超える一つのモメントとして異教的古代に親近性を感じていることは疑いをいれないのである。

したがってローレンスの立場は、「新しい中世」の復活を唱えるベルジャールエフや中世的なカトリックの世界に精神的な抛り所を求めようとするT・S・エリオットの立場などに較べればさらに一まわり大きなかたちでの「近代」の否定だとい

うことになる。パーキンがここで語る衝撃的な言葉、人間は宇宙創造における一つの誤謬であり、人間が今日のような醜悪な存在であり続ける限り人類は滅びた方がよいという言葉の真意も、この観点に立ってこそ過不足なく把握することができるにちがいない。

だが、われわれがここで理解しなければならぬことは、こういう激しいかたちでの「近代」への拒絶が現われているという正にそのことが、逆にヨーロッパの近代の健全さを示すものに外ならないという逆説的な事実である。何故なら、ロレンスをはじめとする秀れた思想家たちが、「近代」の狂気をするどく嗅ぎわけ、深い憂慮と不断の警告を発し続けていることは、とりも直さずヨーロッパ精神の再生への意志がまだ麻痺しきつてはいないことを示していると考えざるを得ないからである。自らの時代の危機と弱点とを十分に認識して、その上で正常な自己同一性を守ろうとしている精神が、それにもかかわらず破滅することは、あり得ないことではないかもしれないが、きわめて稀なことだと思われるからである。

それよりもはるかに危険だといふべきなのは、「近代」という毒薬を喜々として飲み下し、その中に含まれている毒の成分について十分な認識もないままに、毒物による手足の痙攣を「進歩」であると誤認して、自らの肉体をその侵略にまかせたような場合であろう。つまりロレンスが生涯をかけて警告したような「近代」の危機は、彼が激しい嫌悪を投げつけたヨーロッパの世界よりも、そのヨーロッパの近代を略奪することによって自らの「近代」を築き上げるを得なかつたわれわれの非ヨーロッパ的世界にこそ、一層正確に適合すると考えるべきではないだろうか。

小説『恋する女』の第三十章「雪に閉じこめられて」の結末近くで、「持続」に対する「瞬間」の反逆という近代的な時間意識に疲労しきったグドロンが恋人のジュラルドについて、この男を組織しているのは百万の車輪と歯車とをもった時計仕掛けにすぎず、退屈この上もない存在だと考えるところがある。このジュラルドを待ちうけているのは、雪の中で嘔吐感に悩まされながらの死以外の何ものでもない。いうまでもなくこの死が象徴しているものは近代ヨーロッパ世界の完全な崩

壊なのだが、この崩壊を他人ごとだと考えてすませることはわれわれには到底できないのである。文化的な持続の完全な喪失という「白い極地」の中で死ぬジェラルドの幽霊のような顔に、われわれ自身の未来の影がうつつていないと誰に言えるだろうか。

しかしだからといって、われわれはローレンスが終世自らの故郷であると感じていたような古代ゲルマン的なニルヴァーナをわれわれ自身の故郷であるとみなすことは、できない相談である。ローレンスは、彼自身の「血と肉体への信仰」⁽¹²⁾を徹底的に追求することによってゲルマンの古代を発見したのであって、私はそれを心から賛嘆して止まないけれども、この「古代」はいかにしてもわれわれ自身の「古代」ではないからである。

われわれには当然、われわれの「古代」にかえる別の途と、別の努力が存在しなければならぬであろう。

注

- (1) Erich Auerbach: *Mimesis* (Princeton University Press) Chapter II
- (2) Harry T. Moore: *The Life and Work of D.H. Lawrence* (Unwin Books) p. 127
- (3) R. M. Grant: *Gnosticism and Early Christianity* (Columbia University Press) Chapter I
- (4) ショシヤ・ブール『人間の時間の研究』井上究一郎他訳(筑摩書房)第十八章
- (5) 同右
- (6) 同右
- (7) Harry T. Moore: *The Intelligent Heart* (Penguin Bionraphy) p. 281
- (8) Patricia Merivale: *Pan the Goat-God, His Myth in Modern Times* (Harvard University Press)
- (9) Harry T. Moore: *The Intelligent Heart* p. 281
- (10) Martin Heidegger: *Die Zeit des Weltbildes* (Vittorio Klostermann)
- (11) Chapter 19 Moony
- (12) *The Collected Letters of D.H. Lawrence*, Volume one (Heinemann) p. 180